

学生授業評価における「到達目標達成度」関連要因の分析

杉田由仁、流石ゆり子、小林美雪、須田由紀、山本奈央、中橋淳子
(山梨県立大学看護学部)

1. はじめに

本学では、平成24年度より各科目のシラバスに「到達目標」を明記することとなり、これを受けて学生授業評価においても「No. 18 あなたはシラバスにあるこの授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか」という、学生が到達目標達成度を自己評価する質問項目¹⁾の新規導入が行われた。24年度の前期授業評価・全体集計結果によると、これまで各教員による授業改善取り組み効果の指標としてきた「総合的満足度」が、前期結果としては過去最高の4.29であったのに対し、学生による「到達目標達成度」の評価結果は3.78であり、0.51ポイントのギャップが認められた。看護学部に関しても、「総合的満足度」4.17に対して「到達目標達成度」は3.75という結果であり、同程度のギャップ(0.42)が認められた。このギャップの大きさは、各授業における学生の「到達目標達成度」を高めるためには、教員が「総合的満足度」を高める授業づくりを行うのみでは不十分であり、学生による到達目標の達成度評価に関連する他の要因についても配慮した授業づくりを行う必要があることを示唆するものと言える。そこで、学生による授業評価結果データを分析し、学生による到達目標達成度評価に関連する要因を究明し、学生に対して満足感と共に達成感を与えることのできる授業づくりを行うための改善ポイントについて考察を試みた結果について報告を行う。

2. 分析の方法

今回の関連要因分析においては、欠測値のない340科目の有効データ²⁾を分析対象として、重回帰分析による探索的な分析を試みた。目的変数は、到達目標達成度を問う「No. 18 あなたはシラバスにあるこの授業の到達目標をどの程度達成できたと思いますか」の評定平均値であり、説明変数はNo. 18を除く、他の質問項目(No. 1~17, No. 19)の評定平均値である。重回帰分析によれば、どの説明変数(質問項目)がどの程度、目的変数(到達目標達成度)に影響を与えているかを知ることができるので、到達目標の達成度評価に影響を与える質問項目とその度合いが明らかになると考えた。

3. 結果

重回帰分析の結果、Q4「この授業のレベル(難易度)は適切だった」Q16「予習・復習など授業時間以外に学習をした」Q17「この授業には真面目に出席し、意欲的に取り組んだ」という3項目が、授業の到達目標に対する学生の「達成感」に関連する具体的要因であることが明らかになった。修正済決定係数は0.7254、重相関係数は0.8602であり、モデルには一定の精度が認められた。また「授業のレベル」>「授業への出席・意欲」>「授業外学習」の順に、到達目標達成度に正の影響を及ぼすことが確認された(図1)。

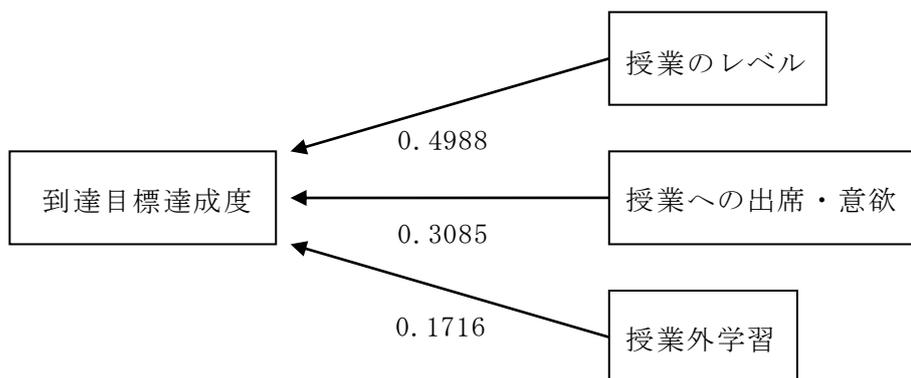


図1 到達目標達成度に関連する要因

4. 考察とまとめ

到達目標の達成度評価に関連する3つの要因に基づき、満足感と共に達成感を与えることのできる授業づくりを行うための改善ポイントについて考察したところ、第1のポイントは「授業レベルの再検討」であることがわかった。具体的には、授業レベルの評価結果に基づき、下記1)～4)のいずれかを適用することが改善につながることを示唆された。

- 1) Q4「この授業のレベル(難易度)は適切だった」の評定平均値が4.0未満で「授業レベルが不適切」である場合には、学生の実態に合ったレベルに再設定する。
- 2) 「授業レベルが適切(4.0以上)」の評価を受けている場合には、Q16「予習・復習など授業時間以外に学習をした」の評定平均値を確認し、4.0未満であれば、「授業外学習」を促進する方法について検討を行う。
- 3) 「授業レベルが適切」および「授業外学習」に関して4.0以上の評価を受けているが、達成度評価が4.0未満の場合には、「授業外学習」の内容・方法について検討を行う。
- 4) 「授業レベルが適切」で「授業外学習」に関しては4.0未満の評価を受けているが、達成度評価が4.0以上の場合には、学生が自主的に取り組む「授業外学習」のあり方について検討を行う。

第2のポイントは学生の「出席状況や授業態度の再評価」であることがわかった。今回の関連要因分析を通して「真面目に意欲的に取り組むことのできる授業づくり」を行うことは、学生の授業に対する「総合的満足度」を高めるのみならず「到達目標達成度」を高める要因となることが確認された。したがって、学生の出席状況や授業態度は「授業内容に対する意欲」のパロメーターであると再認識し、授業における学生の受講態度の観察や授業内容に関するアンケート調査の実施などにより、学生が意欲的に取り組むことのできる授業内容を提供しているか再評価を行い、授業内容に検討・修正を加えることが、学生の「達成感」を高める授業づくりにつながることを示唆された。

- 註 1) 達成度 90%以上「5」、80～89%「4」、70～79%「3」、60～69%「2」、60%未満を「1」として、他の項目と同様に5点法で評価を行った。
- 2) 分析のためのデータ使用は、全学FD委員会の許諾を得て行った。